夏色花火

アサゴロモ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏色花火

【Ｎコード】
Ｎ９９１８Ａ

【作者名】
アサゴロモ

【あらすじ】
葉瀬川香澄。男である。身長は小さい方で、彼女イナイ歴１４年。そんな俺でも甘い恋した……ケドさぁ！！！なんでコメディー風になってんのぉ！！！！

第1話●夏色夕食●（前書き）

未熟な作品デスが読んで下さい！！甘・ラブ・コメディー風に仕上がってマス！！

第1話●夏色夕食●

葉瀬川　香澄　１５歳　男
好物・イチゴ　嫌物・トマト　ナス部活・ピッチャー　背番号１０
……男、だ。
マジで香澄っていうＮＡＭＥ。　ちなみにこのお話の主人公だ。
そのおかしな名前の主人公は自分の通う西陵中学校のグランドで、相方もといキャッチャーの岡本大介と自主練習をしていた。
パアァァン！！
香澄が投げた豪速球が、相方の大介のデカイグローブを思いきり叩く。
「スゲェじゃん。いい球だったよ。ケド俺くらいの身長のヤツだったらボールだな」
「うぜっ！どうせ俺はちっちぇえよ！これでも去年より身長伸びたんだぞ？」
「……たった1ミリだろ？」
「……はい。そうです」
ぱすん、と大介から球が送球される。
去年から使っている二人だけの野球ボールは、すでに網目がすりへっていた。
「知ってるか？明日転校生来るんだってさ」
「へぇ～そうなんだ。で、女？」
「イエス」
「マジでかぁぁぁぁぁ！！！」
広いグランドに香澄の無駄にデカイ声が響きわたった。そのデカさを身長に回してやれないのだろうか？余談だが、香澄の身長

は１６１センチ。比較的……ってゆうか、小さい方である。
「マジで？マジで？やったー！転校生の女は相場可愛いって決まりがあんだよ！！」
「そっかぁそっかぁ。嬉しいに決まっているよな？なにせ彼女イナイ歴じゅう…ぶっ！！！！！」
空気との摩擦で高温になったボールが、香澄の方から飛んできた…。うわぁ…痛そっ。
「チクショオ！んだよ　オメーに彼女いるからってよぉ～調子乗ってんじゃねぇぞ　ゴルァ！」
「ふぉっふぉっふぉっ」
「……何？その笑い方…。キモっ」
「有名な怪獣の真似」
……意味分かんねぇ

さて、読者の諸君には何故
「香澄」
とゆう名前がついたか知らなければならない。　実はこの名前は香澄の亡き祖父がつけたものだ。
いや、いろいろ考えた末にこの名前になったんだよ。まぁ、話の一部をどうぞ～
とある病院の１０５号室。そこにまもなく出産を控えている夫婦がいた。
妻
「…あ。今動いた」
夫
「出産日近いもんな。頑張れよ」
妻
「名前どうする？」
夫

「う～ん…ヒトラーとかどうだろう？」
妻
「ウフフフ。真面目に考えていんのか？ゴルァ？」
夫
「んじゃぁザビエル・ロジャード・サンマリア・D・ボブリア・ナポレオンで」
妻
「……離婚しますか？」
なんて低レベルな会話なんだ。まだ日本人の名前でてねぇし。
まあそんなことで会話は進んだのだが、ちょっとした問題が起きた。
それは同病院に入院している祖父の、心臓の病の急変だった。
夫
「親父！！！大丈夫か！！？？」
祖父
「……無理」
夫
「頑張れ！！！孫が待っているぞ！！！」
祖父
「……孫」
夫
「そうだ！孫だ！！」
祖父
「名前は……香澄にせい」
夫
「……男の子だぞ？」
祖父

「嫌じゃい！！ワシは香澄がイイんじゃい！！なんでワシの言うコト聞けないんじゃぁ！！！」
……もはや病人ではない。なんでコイツはこんなに元気なんだ？
祖父
「ワシは香澄が良いの！！」
夫
「解った。解ったから静かにしろ。安静にしなきゃ。」
祖父
「あ……死神が見えるぞ……婆さんにそっくりじゃぁ……あ、ヤベッ……包丁持ってる」
祖母
「あたしゃココにいるよ…誰が死神だって？？」

祖父
「……。」
夫
「お袋……」
祖父
「あぁ……もう死ぬ……香澄ちゃぁん……」
夫
「親父ぃぃぃぃ！！！」

祖母
「あんたぁぁぁぁぁぁ！！！」

って事で香澄になった。
ちなみに香澄ちゃんとは祖父の９９番目の女である。その香澄が愛する孫に引き継がれたのだ……それでいいのか？名付け親……　さて、遠い時間は戻り、ＩＮ・葉瀬川家。　「ただいまぁ～おぉ！ミッキー！帰ったぞ！」

と猫撫で声で、愛犬ミッキー（パグ）を抱き締める。ミッキーの顔はいつも何かにしらけているが、更にしらけてしまっている。
練習着を洗濯機に詰め込み、私服に着替えた。
麦茶でも飲みてぇなぁ～と思いつつ、台所に近付くと何か異臭が漂う……何？
「ダメェェェェェェェ！！！！！」
階段からドタドタ足音が近付き、振り向くと、スリッパを履いたまんまドロップキック！
「ぐえばぁぁぁぁぁ！！！！！」
……それはちゃんと香澄の頬にめり込んだ。あ、なんかゴキッっていった。
「ちょっ！？オメー！何すんだよっ！？首ゴキッっていっちゃったじゃねーか！！」
葉瀬川風花…中学一年　香澄の妹である。彼女は両手を広げて、台所のドアを塞いでいる。
「ダメっ！！お兄ちゃん！！絶対中入っちゃダメ！！！」
「はあ！？意味分かんね！お兄ちゃんは腹が減ったんだよっ！！！」
今現在、葉瀬川家では香澄と風花の二人暮らしだ。父と母は二人でイタリアらへんを旅行中。あと数ヵ月は帰ってこない。
だから香澄と風花が交代で家事をしているのだ。ちなみに今日は風花の番。
「とにかく、中入らせろよ。早く夕飯食べたいんだよ」
と、言った瞬間…風花は
「うわぁぁぁぁぁぁん！！！！」
泣き出した。
「えっ！？何？俺なんか悪い事したっ！？」
「ちっ…違うよぉ……ご飯が……ご飯を作ろうと……ご飯にご飯がぁぁぁぁ！！！」　意味分からん
なんなんだ？ご飯にご飯って……ご飯はご飯以外のなにものでもねぇよ

「あっ……あたしお兄ちゃんのために夕飯つくったんだけど…っ……でもっでもっ」

「どうせ失敗したんだろ？焦がしたとかさぁ？俺がちゃんと食うから大丈夫だって」

とは言うものの、首筋に冷汗が流れる

『……ヤバイヤバイヤバイ！！！！風花の飯の失敗なんて最悪だ……！食えたもんじゃねぇ。どうやってこの場を逃げ切るか……』

「お兄ちゃん！食べてくれるの！？やったぁ！さぁどうぞ！」

そういって台所のドアを開ける……開ける……開け……

臭い

何を作ったんだろうか？この娘は……？

しかもなんか煙っぽい

その煙はテーブルの上の黒い物体からでている。

なんなんだよぉ！！一体！！

第1話●夏色夕食●（後書き）

アサゴロモです。本名アサゴロモ　コメタクなんですけど、コメタクに励ましメッセージ送ると、コメタクの身長が3ミリ伸びます。協力してくださいw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9918a/

夏色花火

2010年10月28日06時50分発行